

共に立ち上がる地域社会

氏名：工藤 星子

学校名：八戸市立多賀小学校

担当教科：全科

実践教科：総合

時間数：11 時間

対象学年：5・6 年生

人数：28 人(5 年 11 人 6 年 17 人)

【実施概要】

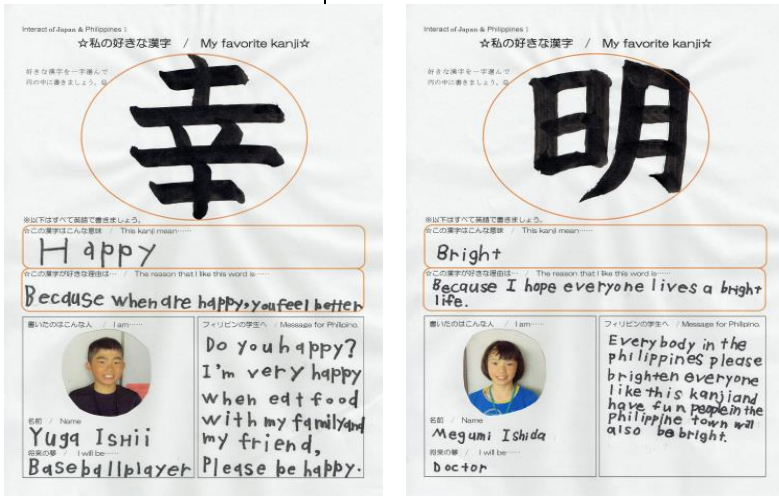
【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

八戸とフィリピンの自然災害復興を通して地域社会のつながりを学び、地域・国の未来を担う意識を高める。

【2】 単元の評価 規準例	(ア) 関心・意欲・態度	他国に興味・関心を持ち、多様な文化や価値観に共感し尊重することができる。
	(イ) 思考・判断・表現	疑問をもって課題を発見し、自分の考えを表現することができる。
	(ウ) 技能	情報を収集・分析して、解決策を提示することができる。
	(エ) 知識・理解	自分と世界のつながり・関係を意識し、物事を地球的視野で捉えることができる。
【3】 単元設定の 理由	本校のある多賀地区は、東日本大震災の際に海から直接津波が押し寄せたり、近くを流れる五戸川が逆流したりして児童の住む地域や学校が被害を被った。児童は、「防災ノート」という八戸市で作成した防災教育教材を使い学んだり、毎年避難訓練で校外の安全な場所まで避難して防災担当者から話を聞いたりすることで、災害に対する意識は高い。しかし、地域のつながりの中で守られていることもあり、自分たちもその地域の一員だという意識は低く、自分事として防災を考えられていない面も見られる。 以上のことから、東日本大震災の記憶を風化させないために、また、子どもたちの防災意識を高めるために、フィリピンが日本と同様に自然災害が多く同じ課題を抱えていることに焦点を当て、この実践に取り組むことにした。2013 年に発生した台風ヨランダの被害地タナワン市と自分たちの地域の復興について多面的に学ばせ、防災を通して地域・国の将来像を考えさせたい。 まず、フィリピンの写真を使ったかるたで様々な角度からフィリピンの人柄や文化に触れる。その中で、地震や高潮などの自然災害を受ける日本と同様の面があることを知らせる。 次に、自分たちの地域に目を向けさせる。多賀地区の災害復興に尽力した先生方や職員、地域の方にインタビューをし、震災復興の状況や復興への思い・願いを知ることにより、自分達の地域を見つめ直させる。	

	そして、再びフィリピンの自然災害に視点を移す。台風ヨランダの被災状況を理解させ、課題を自分事とするために、自分が市長だったら復興するために優先させるものは何か、グループで復興支援のダイヤモンド・ランキングを作りながら話し合わせる。優先事項の理由やそれらのつながりを考えさせたい。タナワン市長が実際に行った「Each new day is better day in Tanauan」「We remember, We share, We stand strong together」という信念に触れさせる。 地域の人々が同じ目的意識をもって互いに手を取り合って立ち上がり、ほかの組織とも協力して復旧・復興が行われたことに気付かせる。学んだことを生かして、理想の八戸・日本・世界の姿を絵で表現し、レイテ島のヤシの木で作られた商品と多賀の木で囲んだフレームとともに記録に残す。それをタナワン市長やタナワン小学校の児童たちにメッセージを添えて送り、共に災害から立ち上がって未来を創っていく思いを共有させたい。そして、地域・国の防災や発展に仲間と手を取り合い関わっていくことを考え続けさせたい。
--	--

【4】展開計画（全 11 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
2 事前	「フィリピンの子に届けよう」 手紙や学校紹介掲示物を作ることを通して、フィリピンに興味を持つことができる。	フィリピンについてインターネットで調べる。フィリピンの小学生に向けて、自分の好きな漢字や選んだ理由、将来の夢などを書いた手紙を書く。学校紹介ポスターを作る。	・手紙
		好きな漢字を習字で書き、英語でメッセージを添える。	
			
	日本の学校行事、日常の勉強風景や掃除の様子、相撲、野球の写真を使った学校紹介ポスター		

フィリピンの人や生活、自然
災害について知り、日本との
共通点を見つけることがで
きる

フィリピン写真かるたを通して、フィリピンの人々や生活の様子、手紙交換をしたフィリピン児童たちの様子を伝える。イメージマップにまとめる。最後に、日本と同じように自然災害に多く見舞われる国であることを知らせる。

- [illegible]

[illegible]

34

5
6
7

「共に立ち上がる地域社会
～八戸の復興～」

自分の地区の震災復興状況や関わった方の思い知ること、地域を見つめ直し防災について振り返ることができる。

多賀地区の被害状況や復興に関して知っていること、もっと知りたいことを話し合う。震災後の地域、学校の対策や地域復興ボランティアに関わった方々にインタビューをしたり、防災組織を立ち上げ復興に尽力した地域の方をゲストティーとして招き、話を伺う。八戸の復興理念「より強い、より元気な、より美しい八戸」について考える。

- ・「東日本大震災八戸市の記録」資料
- ・写真



学生のときに多賀地区で災害復興のボランティアをした先生、被災直後に赴任し心のケアを行ったり復興行事に関わったりした先生に、当時の様子や思いをインタビューする



地域防災組織を立ち上げた地域の方にゲストティーチャーとして来ていただき話をうかがう



復興のキーワードとなる言葉を中心に各グループで学んだことを発表する。その項目のつながりから、八戸の復興理念「より強い、より元気な、より美しい八戸」について考えさせる

8 本時	「共に立ち上がる地域社会 ～フィリピンの復興～」 台風被害の復興支援について話し合うことで、課題を自分事として地域社会のつながりについて考えることができる。	台風ヨランダによる被害状況を知る。そこからタナワン市がどのように復興したのか、自分が市長だったら何を優先して行うのか、グループで復興支援のダイヤモンド・ランキングを作りながら話し合わせる。最後に実際の取り組みや市長の思いに触れさせる。	・写真 ・動画
9 10 11	「共に立ち上がる地域社会 ～未来に向けて～」 これまでに学んだことから自分たちの考え、思いを相手に発信することができる。	これまでの学びをもとに、八戸・日本・世界の未来像を絵で書き表したり、タナワン市民へのメッセージを考えたりする。自分たちの地域、フィリピンのこれからの防災、発展について考えたことを発信する。	・レイテ島のヤシの木で作られた商品



レイテ島のやしの木から作られた商品と多賀の木を組み合わせでフレームをつくり、その中に自分たちが理想とする未来像を書かせた。学んだことを通して思ったことや伝えたいことを書いて、子どもの顔と未来の絵と共にメッセージ動画を作成し、タナワン市長と訪問したタナワン市の小学校に送った

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1 台風ヨランダの被災状況を知る。 (1) 東日本大震災の八戸の状況と比べる。 ・多くの建物が流されて壊れている。 ・辺り一面がきれいになっている。 ・地面に船が乗っている。 ・ヤシの木がかれている。	・津波と高潮の共通点や相違点を確認する。 ・タガログ語に高潮を表す言葉がなく「ストームサージ」という意味が的確に伝わらず避難しなかったことに触れる。	・台風ヨランダ被災直後の写真 ・震災後の八戸の写真
展開 (35分)	(2) タナワン市役所の市長やタナワン小学校の児童の写真から分かることを話し合う。 ・みんな笑顔。 ・生き生きとしている。 ・建物が新しい。 2 どのように復興していったのか。自分が市長だったら何を優先して行うか考える。 (1) 全体で復興に必要な意見を整理する。 ・公共施設復旧 ・仮設住宅作り ・食べ物（水）の確保 ・安全管理、防犯 ・心のケア ・道路の復旧 ・電気、水道、下水道、ガス ・医療面の強化 ・学校再開 ・商店の復旧、再開 ・仕事の提供 ・ネットワーク作り ・情報提供	・学校紹介の掲示物や手紙でやり取りをしたタナワン小学校の児童が被災者であることを伝える。 ・市長が就任して4ヶ月で台風ヨランダに町が襲われたこと、自身も市役所で被害にあったことなど背景を教える。 ・一項目ずつ内容を確認する。	・市長、子どもたちの写真 ・復興項目の資料 ・模造紙

	(2) グループで復興支援の「ダイヤモンド・ランキング」を行う。 ・全体で整理した項目の中からより重要だと考える9つを選び、順に並べてひし形にして提示させる。 (3)各グループでランキングをもとにして話し合いの結果を発表する。 ・特に大事だと思った観点3つとそれらの関わりを発表する。	・自分たちが重視する観点、その理由、観点同士のつながりを話し合わせる。 ・グループ毎のランキングと方針の共通点や相違点、また八戸の復興支援と関連づけて発表を聞く。	
まとめ (5分)	3 実際にタナワン市長が行った復興について学ぶ。 「Each new day is better day in Tanauan」 「We remember, We share, We stand strong together」	・実際におこなったことが正解という扱いではなく、市長のリーダーシップや行動の原動力となっている思い、また、同じ目標に向かって地域住民一人一人やボランティア団体と手を取り合い信頼して活動することの大切さに目を向けさせる。	・タナワン市の復の写真、動画

【授業実践の様子】



復興ダイヤモンド・ランキングの作り方や項目同士を結びつける考え方を伝える

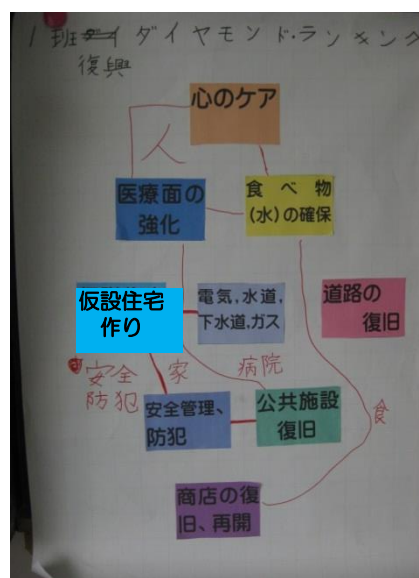
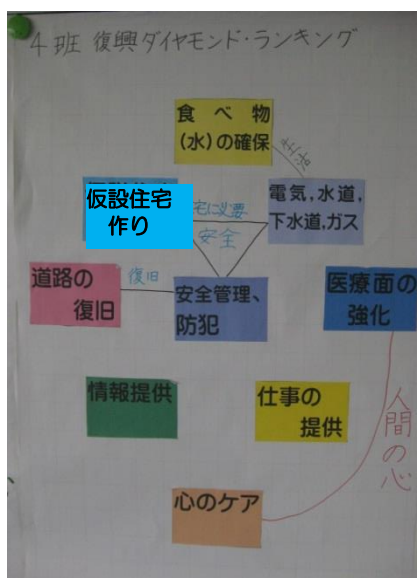


5・6人のグループで、話し合いながら自分たちなりの順位付けをし、並べていく



並べた項目同士の関連性を考え、生活・安全・安心・人・復旧など言葉を書き加える

ランキングの上位3項目を選んだ理由とそれらのつながりを全体の前で発表する



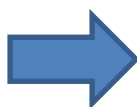
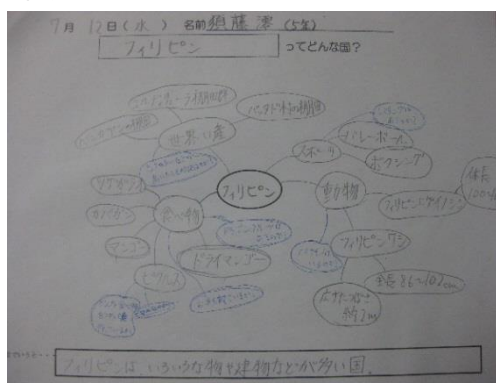
食べ物（水）の確保、仮設住宅作り、電気・水道・下水道・ガスといった生活面や、心のケア、医療面の強化といった人の心に寄り添うものが優先的だと考えるグループが多かった

【6】 本時の振り返り

導入の台風ヨランダと東日本大震災の被災直後の様子の比較では、共通点を見つけることよりも台風ヨランダの被害の大きさに驚く反応が見られた。展開では、自分がタナワン市長だったら何をなぜ優先して行うべきなのか、自分の問題として話し合うことができていた。復興ダイヤモンド・ランキングに入れるものを13項目から9項目に絞り、さらに順位をつけることで、復興に必要なものが明確になっていた。一旦順位を付けたものに納得がいかず、自分の考えをグループのみんなに伝えて優先順位を変更する場面も見られた。その際に、これまで多賀地区の復興支援の学習を生かして、ランキングや項目のつながりを考えられていた。各グループの全体発表では、自分たちのグループとの共通点や相違点を考えながら聞き合った。まとめに時間を十分取れず、タナワン市の復興の様子の動画は次の時間に見せた。市長が信念としていた「We remember, We share, We stand strong together」という言葉から、児童が自分事として問題を考える大切さを確認した。

【7】 単元を通した児童生徒の反応/変化

○フィリピンについてのイメージマップ



文化、生活の様子、人柄など様々な視点からフィリピンのことを理解できるようになった

○インタビュー後に意見をまとめた板書



毎回、意見を分類・整頓したり関連付けたりすること、前時とのつながりを見つけることで、大きな単元のつながりや日本とフィリピンの関わりが見えてきた

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

普段一緒に学習する機会のない5・6年生で話し合いながら学ぶことで、意見をつなげたり関連づけたりして考えられるようになった。また、グループで率先して意見をまとめたり、全体の前で自分の言葉で思いを表現したりすることができるようになった児童もいた。

【途上国・異文化への意識の変容について記載下さい】

（授業前）

手紙や学校紹介ポスターを作ったときに、英語の訳をALTに聞いたりタブレットで調べたりするのに消極的な児童がいた。また、インターネットでフィリピンについて調べたときに、食べ物や動物など自分が興味あるものだけで、人や文化のことにあまり興味をもてずイメージマップの広がりが乏しかった。フィリピンを一言でいうと「おいしい国」「人口少ない国」といった一面的なものが多かった。

（授業後）

手紙の返事書いている言葉をなんとか理解しようと翻訳サイトを駆使したりALTに自分から声をかけて聞いたりし、書かれていることが分かったとそれを友達に伝えて交流を楽しんでいた。道徳で、名取市立みどり台中学校の畑中麻衣子教諭（今年度参加者）の授業教材であるロールプレイングを小学生向けに変更して行ったところ、問題が一面的でないことを理解して様々な人の立場から課題を捉えることができていた。「いろいろなものがあっていい国」「意外なものが多い国」「大変なこともあるがとてもよい国」と視野を広げてフィリピンを見ることができるようになったことが分かった。

【8】自己評価

1. 苦勞した点	フィリピンの国の紹介から、自分たちの地域に目を向けるまでの思考の流れがつながりにくく苦勞した。JICA でフィリピンの子どもたちに向けて作製した防災体験ハンドブックを使うことで、フィリピンにも自然災害があり、日本と共通の課題があることに気づかせることができた。
2. 改善点	時間配分が難しく、予定時間よりも延長することがあったので、2 時間続けて設定したり、活動内容を吟味したりして行う必要がある。今回はグループで復興ダイヤモンド・ランキングを決めたが、場合によっては、一人一人が自分のランキングを作ってペアで交流させ、ペアでひとつのものを作ると個人の意見が反映されやすくなる。また、ランキングの全体発表の後に、それらの類似点や相違点を見つけることで、より防災・復興に対する見方が深められる。
3. 成果が出た点	物事のつながりが見えるようになり、一つ一つの事象が意味をもって関連していることに気付いたりするようになった。それが、人と人、人と地域、地域と国、国と国といった大きなつながりになることで、支え合い助け合う関係が強固になる。 「学んだことや伝えたいこと、タナワン市民に送る児童のメッセージ」 ・僕は大人になったら市川と家族を守れる人になりたいです。 ・私たちの青森県八戸市もタナワン市のような大きな被害を受けています。お互いに助け合ってがんばっていきましょう。 ・より災害に強い町を一緒に作りましょう。 ・私は将来、自然災害から町を守り、明るいこの町を保っていける世界にしたい。 このように、子どもたちが自分を地域・世界の一員として災害復興・防災について考え、自分の言葉で表現できるようになった。
4. 備考（授業者による自由記述）	タナワンと多賀の復興の共通点を見つけ、国が違っても復興に重要なことは同じだということを知って驚いた。1 点目は、同じ目的をもった組織を立ち上げ、コミュニティのつながりを広げて協力体制を作ること。2 点目は、地域住民に防災意識を高くもたせること。 タナワン市長と多賀の防災組織を立ち上げた会長さんの、周りと手を取り合い互いを信じ困難な状況に立ち向かって躍進した行動力に感銘を受けた。

参考資料

- ・What Happens in Disasters! JICA 資料
- ・「より強い、より元気な、より美しい八戸」を目指して東日本大震災八戸市の記録
八戸市防災安全部防災危機管理課 平成 25 年発行
- ・「開発教育実践ハンドブック 参加型学習で世界を感じる」 開発教育協会 2013 改訂版第 2 刷